asano-masatomi-kouen-kai-dayori

# あさの正富後援会だより

第2号
No.02
2021.12.25 発行

あさの正富後援会事務所
〒323-0034 栃木県小山市神鳥谷 1-6-19
TEL.0285-25-6577 FAX.0285-25-6627

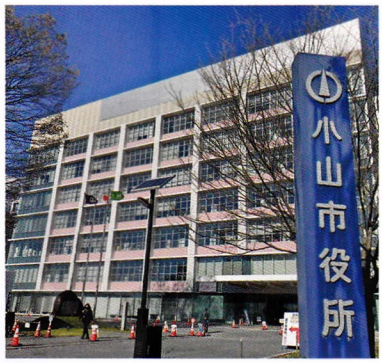
## 2021年を振り返って

浅野正富

2021年は10月まで新型コロナウイルス感染症に振り回され続けた1年でした。昨年来の第3波に始まり、第4波、第5波と感染拡大が続き、8月19日には1日で小山市の新規感染者が59名という最多を記録しました。また、ワクチン接種では国や県の方針が揺れ動き、接種率を上げたくてもワクチンがなかなか届かない状況の中ではままならず、市民からの苦情、不満が市に殺到するということが続きました。11月になって小山市や栃木県も新規感染ゼロの日が続くようになり、ようやく一息つけるようになったところです。

また、東京2020オリンピック・パラリンピック関係、1年後に迫るいちご一会とちぎ国体・とちぎ大会の準備関係でもコロナ対応には大変苦労しました。オリンピック・パラリンピックの開催も一時は国民の過半数が中止や再延期を求める中で国が強行し、結果的には大きな混乱は発生しませんでしたが、あくまでも結果が最悪なものにならなかっただけで、最悪の結果が発生した時のことを考えるとぞっとします。開催後には開催して良かったという国民の声が多くなりましたが、そのことと危機管理の問題として、大きな危険に国民を晒しながら開催すべきだったのかということは、きちんと分けて検証されるべきです。IOCやアメリカのテレビ局のためなら、成功か失敗かどっちに転ぶか分からなくてもとにかくやるんだという博打を打つような日本の国政のあり方に、大きな違和感を感じます。

新型コロナのためにかすんでしまいがちですが、5月の市役所新庁舎、7月の市立体育館のそれぞれのオープンは小山市にとって数十年に一度の大型公共施設の連続オープンであり、本来であればもっと盛大に祝われるべきものでした。



新庁舎

特に新庁舎は、1964年の前回の東京オリンピックの年に建てられた旧庁舎の57年ぶりの建て替えで、これから50年、60年間小山市の行政の中枢として機能する施設であることを考えると、新庁舎オープンは小山市の行政を昭和と平成という時代から完全に解き放ち令和という新しい時代に相応しいものへと変えて行く一大契機と言えます。

また、3月、9月、12月とこの1年間で3回の市民フォーラムを開催しましたが、新庁舎がオープンするのと同じ年に私が公約としていた市民フォーラムを開始できたことは、市民が主人公の小山市政に変わっていく確実な兆しであることを市民の皆様に感じ取って頂ければ幸いです。まだまだ市長や職員が公開の場で普通に市民と対話をすることにお互い慣れていませんが、市民フォーラムの回数を重ねることによって当たり前のことになっていくでしょう。そして行政と市民の間の共通認識をもっと大きく分厚いものにしていくことで本物の市民が主人公の行政に変えて行くことができるのです。

今回は詳しく述べるには紙幅が足りないのですが、小山市にはまだまだ多くの課題があります。特に社会資本の基盤整備に関してはとても県で2番目の都市と胸を張ることができない状態です。人を呼び込む、企業を呼び込むと言っても、小山市に来てくれた人や企業ががっかりしてしまうようなことでは本末転倒になってしまいます。

これからの小山市にとって最も優先しなければならないことは、今まで疎かにされてきた持続可能な都市経営にとって必要とされる基本的な施策を確実に実践することであり、私は残された2年半という任期の中で、市民の皆様と具体的に対話を重ねながらできる限りの対応をしていく所存です。2022年には皆様とより深化した対話ができることを楽しみにしております。

そして今年の出来事で忘れてならないのは、10月に行われた総選挙で前職佐藤勉候補が10回目の当選を果たした栃木4区において、小山市在住である新人の藤岡たかお候補が4度目の挑戦で比例復活当選を果たしたことです。これからの栃木4区は二人の衆議院議員によって国政と繋がっていくのです。

小山市民としては、9年半地元小山を隅から隅まで回り続け市民の声に耳を傾け続けて来た藤岡衆議院議員には小山市民の声を直接国政に届けてもらう役割をしっかりと果たして頂くことを期待しています。

最後になりますが、2021年皆様には大変お世話になりました。そして2022年も皆様から格別のご支援を賜りますよう、よろしくお願い致します。

新しい市長公室で遊水地関係者から要望書受領

# コウノトリに選ばれた「田園環境都市 小山」のまちづくり

浅野正富

## 1 はじめに

私が市長選の公約の一つとして掲げ、市長就任後は市政の運営方針の一つとしているのが、「田園環境都市 小山」のまちづくりです。そして、昨年、今年と渡良瀬遊水地ではコウノトリが2年連続繁殖していますが、野外でコウノトリが繁殖しているのは東日本では渡良瀬遊水地しかありません。渡良瀬遊水地の一角を占めコウノトリが営巣する人工巣塔がある小山市は、正にコウノトリに選ばれた「田園環境都市 小山」と言えるでしょう。何故私が田園環境都市のまちづくりを発想するようになったのか、そして具体的にどのようなことを構想しているのか。私が小山市長を務めていく上で最も重要な仕事の一つと考えている「田園環境 小山」のまちづくりについて、後援会の皆様、市民の皆様に広く知って頂きたいと思い今回筆を執った次第です。

## 2 里山保全をきっかけとして

そもそもの田園環境都市の発想の原点は、弁護士会で里山保全に関する調査・提言活動に関わったことにあります。今では誰もが知っている里山という言葉が使われはじめたのは1990年代初頭のことで、私は、1993年から里山保全の問題に足掛け10年以上関わり、首都圏にかつて広く存在していた農村環境が都市のスプロール化によって市街地に変わり里山が減少消滅してきた過程に、都市計画がどのように関わってきたのかということから調べ始めました。

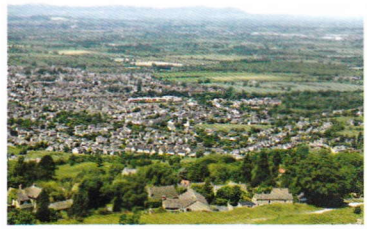
海外に目をやると、ロンドンでは都心から車で30分も行かないうちにグリーンベルトの田園環境が広がります。産業革命による大気汚染が進行して兵隊となる若者の体格が劣化することに危機感をもったヨーロッパ諸国は、公園は都市の肺であるとして都市における緑地保全に意を尽くしてきました。都市にとってその内部や周囲に緑地の存在が不可欠なことは、ヨーロッパでもアメリカでも当然のこととされています。しかし、東京の場合は、都心から1時間電車に乗っても家並が続き、まとまった緑がほとんど見えなくなってしまっているのが現状です。東京にはまともな都市計画がなかったために、こんなに緑が少ない大都市になってしまったのかと思えます。ところが、戦前には東京にも東京緑地計画というグリーンベルトで都心を取り巻く計画がありました。

戦前の専門家は、都市と緑地の関係の重要性を正確に理解して都市計画を作っていたのです。しかし、戦後の経済成長一直線に染まった日本は、最終的に東京緑地計画を放棄して東京一局集中に邁進し、今では東京を都市的集積地域人口3805万人の世界一のメガシティに押し上げました。

## 3 江戸のまちとイギリスの田園

江戸時代の江戸のまちは人口100万人を超える世界一の都市でしたが、江戸の町は「田園都市」「庭園都市」と呼べるほどに花と緑にあふれていたと言われています。1858年に江戸に入ったイギリス公使のオールコックは、その印象を「(江戸は) 冬でも景色が美しく、広い谷間のふところに抱かれている。ゆるやかな坂が多く、緑の森に囲まれている・・・」と書き残していますし、イギリスの植物学者ロバート・フォーチュンは江戸の町をみて、「樹木で縁取られた静かな道や常緑樹の生垣などの美しさは、世界のどの都市も及ばないだろう」と賞賛しています。同じ世界一とは言え、里山の存在を消し続けてきた東京は江戸とは全く違うまちに変貌してしまったと言えるでしょう。そして、都市に住む人々の田園環境に対する意識もまた大きく変わってしまっているのではないでしょうか。そもそも戦後の日本は、国際競争力の弱い農林業について一貫して税金を投じて保護しなければ存続できない厄介な産業と見做し、自由貿易を進め工業製品の輸出を拡大するために代わりに農産物の輸入を拡大していく政策を推し進めてきました。食糧自給率が40%を割ってしまうことが世界の常識の中ではどれだけ異常なことかを意に介することもなく、真剣に農業振興に取り組んで来たとは到底言えない状況を続けてきたのです。

私が中学生のころ、ビートルズ解散後間もないポール・マッカートニーが発表した「RAM」というアルバムのジャケットはポールが当時購入した農場での写真が使われていましたが、それを見てカッコイイなとは思いながらも何故ポールが農場で生活しているのかよく分かりませんでした。しかし、弁護士会で里山保全に関わり何度か海外視察にヨーロッパを訪ねる中で、欧州諸国で如何に農村や農業が大事にされているかを目の当たりにし、また、ロンドンで成功し財を成した人にとっては、グリーンベルトの外側に家を求め、農村で居住することがステータスであることを知るようになって、ようやくポールが都市生活と農場生活を両立しようとした訳が分かりました。そして、イギリスの素晴らしい田園環境を代表するコッツウォルズ地方を訪ねた時には、人々の普段のくらしが営まれている田舎の村がとても魅力的なことにイギリスという国が持つ田園環境に根差す文化と伝統の力の大きさを感じました。



このようにイギリスの田園空間が美しいことについて、一部の識者からは日本の農村を見習った結果だとも指摘されています。明治時代に日本に視察にきたイギリス人たちが日本の農村の美しさに驚き、帰国して田園整備に力を入れた結果、イギリスの現在の素晴らしい田園空間が形成されたというのです。それほどまでにかつての日本の農村は美しかったのでしょうか。私が昭和44年に区画整理される前の今の乙女の住所地に東京の団地から引っ越してきたころには、確かに日本の農村の美しさの名残りがそこら中に存在していました。そして今の市街地には見られない自然の豊かさがあり、自宅の周りは平地林に囲まれ様々な生きものが生息していました。ある日勝手口のドアを開けると、ドアとコンクリートの三和土の間のわずかな隙間から家の中に侵入していたとぐろを巻いたヘビの姿に驚いたこともあります。家の裏にあった河岸段丘のがけには清水が湧き沢ガニが生息していましたが、区画整理で平地林の多くが伐採され、清水はなくなり人工的排水に取って代わられました。

## 4 欧米の田園環境保全を基礎とする都市計画と持続可能性

イギリスでは、ハワードが「田園都市論」で提唱した、田園環境の中で人口規模3万2000人程度の都市がクラスター上に存在する都市群の建設がレッチワースで実現し、東京の田園調布のモデルとなりました。ナポレオン3世の命を受けパリ大改造を成し遂げたオスマンは日比谷公園の47倍の広さがあるブローニュの森を整備しました。アメリカではパークシステムによって、都市でありながら都市でない、田園でありながら田園でない郊外が創造されました。都市環境と田園環境を調和させたまちづくりの取組みは欧米では19世紀から100年以上の歴史があります。

里山を保全していくには、改めて都市環境と田園環境の調和がとれたまちづくりのできる都市計画が必要とされます。また、里山が維持されてきた循環型の社会経済システムは江戸のまちを250年以上も田園都市や庭園都市たらしめてきたシステムですし、産業革命の究極に現れた大量生産、大量消費、大量廃棄のシステムが限界に直面したことにより1970年代から始まった持続可能な開発の取組みにとっても循環型の社会経済システムへの転換は必須とされています。

里山を保全することに始まった調査研究は、都市環境と田園環境を調和していくためのまちづくり、循環型の社会経済システムへの転換を前提とする持続可能な社会の構築の問題に繋がり、循環性に根差した有機栽培に取り組む農業の重要性や社会経済システムのパラダイム転換を迫る環境教育の必要性を再認識しました。同時に、共同資源管理としてのコモンズと所有権概念の再構成の問題にもウイングを広げ、2004年の関東弁護士会連合会の定期大会で、責任者として「里山保全の新たなる地平をめざして」とのタイトルでシンポジウムを行い、定期大会で採択された「循環性の象徴として里山を保全していくための宣言」をまとめました。そして、シンポジウムで配布した報告書が出版されることになり、翌2005年に「里山保全の法制度・政策ー循環型の社会システムをめざしてー」のタイトルの書籍が陽の目を見ることになったのです。

## 5 生きものと共生する持続可能な社会と定常型社会

私の田園環境都市のまちづくりの発想の出発点はこの提言と書籍にありますが、この前後から参画した渡良瀬遊水地はじめ全国の湿地保全に関わる市民活動では、ラムサール条約の掲げるワイズユースの理念が持続可能性の概念と分かちがたく結びつき、湿地保全活動自体が持続可能な社会構築の取組みの一つとの意識をもって関わってきました。里山保全も湿地保全も生物多様性の維持・向上に貢献するという大きな意義を持っていますが、生きものたちと共生できずして持続可能な世界が実現する筈もありません。ラムサール条約湿地登録後に渡良瀬遊水地で行ってきた生態系の頂点に位置するコウノトリの定着・繁殖のための活動は、生きものと共生する持続可能な社会構築の取り組みそのものと言えます。何故なら、コウノトリが生息、繁殖するためには、微生物を底辺、コウノトリを頂点とする生態系ピラミッドの食物連鎖を構成する様々な生きものが生息できるだけの自然環境が維持されていなければならないからです。

里山保全、湿地保全と持続可能な社会構築の取組みに関わる中で、私は持続可能な社会はかつてのヨーロッパの中世のように人口が一定に維持される定常型の社会であることの認識を深め、この分野の大家である現京都大学こころの未来教育センターの広井良典教授の著作にも目を通すようになりました。定常型社会は、右肩上がりの成長、特に経済成長を絶対的な目標としなくとも十分な豊かさが実現されていく社会とされ、市場経済的な需要は量的には飽和し，むしろそれを超えた，コミュニティや自然やケアや公共性等々に関わる，人間のより高次のニーズや欲求が重要になり、働き方や生活の各方面にわたる「豊かさ」が再定義されていく社会とされています。

また、2015年の国連総会で採択された持続可能な開発目標とされるSDGsの17の目標は、環境、経済、社会に関する多岐の項目にわたる目標になっています。持続可能な開発とは、将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発とされており、それを実現していくために様々な事柄が関連していく中で、SDGsでは、環境・経済・社会の3分野が統合するよう17の目標を掲げているのです。そして17の目標を実現することによって、最終的には地球という限られた環境の中で生かされている私たちがその環境容量の中で生活し経済活動を続け、そして一人一人が自己実現できる「誰一人取り残さない」社会（あらゆる人たちが活躍できる多様性と包摂性のある社会）の実現を目指していることを忘れてはなりません。

## 6 「田園環境都市　小山」のまちづくりとは

小山市は、農業、商工業のバランスが良く、東西南北の交通の要衝にあり、市街地の周辺に農地や平地林の田園環境が広がって思川が注ぎコウノトリが定着・繁殖したラムサール条約湿地／渡良瀬遊水地に繋がるすばらしい環境を有しています。コウノトリによって選ばれた首都圏の中で有数の田園環境都市です。

ユネスコ無形文化遺産に登録されている本場結城紬は、桑の葉を食べて育つ蚕の繭から作られた真綿をつむぐことにより生産される糸を原料とする織物で鎌倉時代に遡る正に循環型の社会が生んだオーガニックな伝統技術であり、田園環境都市に相応しい遺産です。また、国の重要無形民俗文化財に指定された「間々田のジャガマイタ」も五穀豊穣や疫病退散を祈る農村の伝統民俗文化で田園環境都市の重要な構成要素です。このような先人たちの連綿と続けられてきた営みによって形成された田園環境都市としての魅力あふれる小山を将来世代に確実に繋ぎ持続可能なまちにしていくことが「田園環境都市 小山」のまちづくりです。

全世界でSDGsの17の目標を達成することにより持続可能な社会の構築が目指される中で、小山市のまちづくりにおいても当然SDGsの取組みが求められますが、それではSDGsを実践することによってどのようなまちになるのでしょうか。私は、自然生態系の頂点に立つコウノトリに選ばれて共生し、人々が生き生きと暮らす田園環境都市は、SDGsによって実現される持続可能なまちのモデルの一つであると考えています。その意味においても、「田園環境都市　小山」のまちづくりは、この素晴らしい環境を将来にわたって維持向上させ市民一人一人が真の豊かさを実感し自己実現を目指すことのできる、単に市街地整備や農地・緑地の保全等の特定の事業だけを行うのではない、SDGsの実践と一体化し、17の目標をはじめあらゆる分野の政策の体系化と統合が必要とされるまちづくりなのです。

## 7 地域と暮らしの中にある本当に大切なものを求めて

そして、「田園環境都市 小山」のまちづくりによって市民が実感する真の豊かさとは、私たちの毎日の暮らしの中で本当に「大切なもの」を見つけ出し（⇒「小さな自慢が山ほどあります」）、それを守りながら生き生きと暮らし、確実に未来につなげていくことの中にこそあるのではないでしょうか。

私たちにとって本当に「大切なもの」を見つけ出すために、私たちは日々暮らしている小山市の成り立ち、風土、自然、文化、伝統というものを改めて学び直し、そして、希薄になってしまった地域コミュニティを再構築していかなければなりません。まちづくりとはそこに生活する人々が自分たちの営みを常に見つめ直し、生涯を通して学んで行こうとする姿勢によって支えられるのです。

また、小山市全体の「田園環境都市　小山」のまちづくりを進める上で、その基礎となるのは各地域ごとに行われているまちづくりの取組みです。自分たちの住む地域に対する徹底したこだわりの集積が小山市全体としてのこだわりに結実します。私たちがどれだけ深く自分たちが生活する場所＝地域を良くすることにこだわり関われるのか、そしてその中で私たちにとって本当に大切なものを見つけ出すことができるのか、それによってまちづくりの成否は分かれてしまうでしょう。

「田園環境都市　小山」のまちづくりは、このまちを何とか良いまちにして将来世代に確実につないでいきたいという思いを抱きながら地域に根差して日々生活している市民によって担われる、市民のためのまちづくりなのです。

# 風土調査からはじめる 生活者主体の、持続可能なまちづくり

有限責任事業組合　風景社
廣瀬俊介・簑田理香

私たち風景社は、浅野市長の公約「田園環境都市」の実現に向けた基礎的な作業として、今年6月から小山市の風土に関した調査を進めています。今回の中心となる調査地点は、渡良瀬遊水地と隣り合う生井地区です。この調査の中間報告を、「第20回全国菜の花サミットin小山」の第4部「新たな潮流」で、「風土調査からはじめる持続可能なまちづくり」と題して行いました。生井地区の風土調査に関した最終報告書は、「田園環境都市」を構想するための基礎資料として、2022年3月に同サミットの実行委員会を通して小山市に提出しました。

風土は、自然にたいして人が暮らしや生業を通じて長年はたらきかけることでかたちづくられるものと考えられます。風土を調べるには、地域の自然と社会、歴史や民俗、文化、経済といった多くのものごとのそれぞれを知り、それらの関係を知る必要があります。

また、風土の調査では、そこに暮らす人々が共に地域の風土をどう感じ、どう見ているか、幾度かの段階を踏んで知ることも重要です。多くの場合、人々の意識の基層で、地域の風土の性質の根本的なところは共有されています。たとえば、こういう山があり、そこからこういう川が流れ、どんな産物があり、それはこの土地柄のどんなところと関係しているといわれていて、農地と村はこんなところにあって、町は街道のわきにつくられて、神社や寺がどこどこにあって、こんな祭りが続けられてきたけれど今は若者が減って神輿の担ぎ手を探すのに大変で、人々の気質には大体共通したところがあって…といった具合でしょうか。

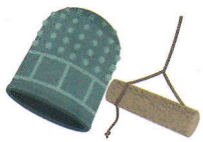
8月、間々田地区乙女より生井地区方面を見る

生井地区周辺も踏査を行った。野木町にて

私たちは、まずそれを聞き取るとともに地域を歩き、地域に暮らす人や地域の外から通う研究者らが調べて書いた資料をあたり、わかったことをもとにまた聞き取りをし、アンケート調査を行い、地域を歩き、さらに資料を探し…といった調査を行います。その途中の段階でわかったことを地域に暮らす人々に伝えると、「ああ、だからここにこんな姿の山があって、だから川はこう流れていて、川底の石や砂の大きさやかたちやそれらの積もり方はこうで、それに適した魚たちをはじめとする生き物が住んで、それを獲る漁法や子供の遊び方がこうで…」と、忘れていたことが思い出されたり、何人かの人々に聞いていたことがつながったりしながら、人々の地域に対する見方が一層鮮明になり、また、深まることが多いです。そうなると、さらに風土に関した情報が集まりやすくなりますし、風土を見つめ直す段階を経て地域に対する認識が確かになったところで、風土に照らして地域の今をどう考えられるか、そして地域のこれからをどう考えるかについて、より確かな見解を伺いやすくなります。

生井地区吉良 愛宕神社

下生井にて



こうした調査から、地域、ここでは小山市がどのように成り立っているのか、また、地域社会の問題の根本にどのような地域の性質や事情があるのか、理解が進められます。そのことで、どこからどう問題が解決できそうか、どう持続可能な「田園環境都市」としてよりよくできそうか、考え進めてゆくための基礎的な情報が集められます。私たち風景社は、こうした情報を、田園環境都市を市民の皆さんが共に構想してゆくための風土調査に基づく基礎資料としてまとめ、市に提出することになります。

いつの時代も、地域の自然にはたらきかけて風土をかたちづくるのは、そこに暮らす人々です。浅野市長が風土に着目された理由には、上に挙げたように風土を読み解く視点を持つことが地域の成り立ちを総合的に理解するために向くことと、風土形成の主体が地域の生活者であり、その皆さんが地方自治体の主権者であることの大きく二つがあるように、私たちは受け止めています。

生井地区のような田園地帯も、駅周辺のような市街地も、それぞれの地域が、その特性を生かしながら、健やかな関係性を結び直すことで、将来世代に豊かな風土を渡していけるよう、私たちも浅野市長と市民の皆さまに、精進しながら伴走してゆければと思います。

# 渡良瀬遊水地のコウノトリ近況報告

文　渡良瀬遊水地みまもり隊　代表 平田 政吉

2016年「きずな」が初めて遊水地に着水し、写真に収めてからもう5年になりました。その後、「ひかる」が営巣し昨年と今年の2度にわたりコウノトリの雛が誕生し「わたる」、「ゆう」、「りょう」、「のぞみ」と名前が付けられて家族が出来ましたね。

それ以降、遊水地内に10数羽のコウノトリが飛んできてくれました。たった1日のみで去ってしまう鳥や1～2週間滞在して喜びと希望と夢を持たせてくれたコウノトリも数羽遊水地の空を悠々と飛んでいました。また、足環が無くて何処から来たのかよくわからない仲間もいました。どうやら京丹後市付近から来たようですね。

当地遊水地の巣塔で生まれた「わたる」、「ゆう」、「りょう」、「のぞみ」のうち「ゆう」は、現在長期出張?で近辺での姿は見られません。しかし、「ひかる」、「レイ」をはじめ3羽の子供たちの他「カズ」、足環351、足環無しの合計8羽がよく空を舞っているようです。過去2年間のコウノトリの行動記録と最近の行動を比べてみますと行動範囲が大変大きくなってきています。久喜市、栗橋、北川辺、舘林、板倉、帯刀、部屋、水代、佐川野、野木、古河等遊水地の何倍もの広さになってコウノトリの位置や名前の確認が大変になっていきました。

また、最近コウノトリの姿を直に見たいと、かなり遠くかから来られる方も多くなりましたが、半日以上待っても1羽も見る事なく帰る家族連れは大変気の毒に思います。一方では、コウノトリの好物を購入したり、近くで捕獲した魚類を餌として与えている方も時々見受けられます。行政の方に連絡し、餌を与える行為は一刻も早く止めていただくようお願いしています。

昨年、東生井にコウノトリ交流館がオープンし年間1万人を超える来場者がありました。大変素晴らしい事とおもいます。さらに最近では、デコイが置いてあるためなのか「ひかる」と「レイ」が交流館近くの電柱に止まり「ひかる」が頻繁に巣材を咥え電柱に巣を作る仕草を何回も見られ、巣材を持ってきては落し、持ってきては落す姿に、近所の方たちは、「ひかる」がかわいそうだ。「電柱1本では巣は作れないよ。」「交流館近くに人口巣塔を立てたならいいね!」「デコイを見て仲間が居ると思っているんだよね。」等々東生井では人気上昇中です。

しかし、毎年11月初旬頃に始まる巣塔での巣作りが一向に進まない様です。巣塔に来る回数も例年の3割以下ですし、来ても短時間ですぐにいろんな方向に飛んでしまいます。今年のコウノトリの動きはなんとなく、おおきな渦のなかで変化している様で心配です。行動範囲が広くなったのは、コウノトリの数が増えたこともあるでしょうが、食べ物が少なく、付近に餌が採れる所(採餌場)がない為ではないでしょうか。最終的に「ひかる」、「レイ」が再び現在の巣塔で抱卵し3度目の雛誕生を皆で祝ってあげられる様静かに待ってあげましょう。

8羽のコウノトリが集まっている様子

# 渡良瀬 子ども自然塾

文　あさの正富後援会会長　楠 通昭
　　ラムサール湿地ネットわたらせ　門馬 悠一

渡良瀬子ども自然塾は、浅野市長が事務局長として活動する「ラムサール湿地ネットわたらせ」が実施しています。渡良瀬遊水地と周辺地域の自然や伝統との触れ合いを通して、子どもたちの生きる力と、地域や自然環境を大切にする心の育成を目指して渡良瀬子ども自然塾は2014年から始まり、今年8年目となりました。今や、登録児童は、30名を超えるまでになり、このうち20名前後が毎回参加しています。6月から9月までの暑い時期を避けて、毎年10月あるいは11月から翌年4月か5月までの間、小学生を対象に月1回実施しております。

2021年は、コロナ禍の影響を受けて1月から3月にかけては開催を控え、4月、5月に開催しました。5月には、渡良瀬遊水地第2調節池にある環境学習フィールド3と4で水辺の生き物調査を行いました。更に、11月に再開した渡良瀬子ども自然塾は、初参加児童が多かったことから、ハートランド城、ウォッチングタワー、谷中村史跡ゾーンなどを巡り、渡良瀬遊水地の全体像を学んでもらいました。

多くの人や地域社会、自然などと直接触れ合える学びや遊びなど様々な活動や経験を提供するため、毎回違ったプログラムを用意しています。

例えば、早春には、渡良瀬遊水地の中に自生するヨモギを摘んで草餅づくりや餅つきに挑戦。また、寒い時期には屋内活動の一環で蕎麦打ち、若しくは、うどん打ち体験を行います。遊水池に近い竹林で竹の切り出しを子どもたちに体験させ、切り出した竹で竹細工に挑戦するなども行っています。こうした活動を通して地域の人達との交流が生まれることにより、地域文化を学び、自然の恩恵を肌で感じてもらっています。また、遊水地内での活動では、自然観察や散策、ヨシ原の中に入り込み秘密基地を作ったり、農作業用のテミを利用した土手滑りを楽しんでいます。

渡良瀬遊水地第２調節池内の環境学習フィールド３で生き物調べをする児童達

この塾で、渡良瀬遊水地の自然に触れて成長した子どもたちは、大人になっても自然への愛着を持ち続け、自然保護への関心を高めることになると信じております。そして、その中の何人かは、再び渡良瀬遊水地へ戻って、環境保全に取り組む人材になってくれることが期待されます。

# 「第6回 コウノトリの生息を支える市民交流会」参加報告

文　あさの正富後援会会長　楠 通昭

10月29日(金)から31日(日)に兵庫県豊岡市で「第6回コウノトリ未来・国際かいぎ」が開催され小山市から浅野市長を含め5名、有志市民団体から4名が参加し、その1員として同行しました。実は昨年11月1日に関東地域コウノトリの今後を考える会交流会(主催:日本コウノトリの会」)が小山市で開催された時、事務局から関東地方でコウノトリが初めて自然孵化し巣立ちしたので来年開催予定の国際会議に多人数の参加要請があったのです。

コウノトリの生息を支える市民交流会は国際会議の前日の14:00から国際会議会場に隣接する「じばさんTAJIMA多目的ホール」で開催され19:30まで行われました。

今回はコロナ感染予防のため各種の対策を織込んだ会場設定やオンライン報告を含めて行われ佐竹代表、関貫豊岡市長の挨拶のあと、鷲谷いずみ先生(東大名誉教授)の【基調講演】「生態系スチュワードシップとコウノトリ」で、現在の環境危機時代においては生態系倫理を踏まえた湿地再生のシンボル・指標がコウノトリなどの大型水鳥であり、それと共生する市民科学の発展が望まれるとの貴重な話がありました。次の【報告と質問・議論】では野性復帰の取り組状況と課題、市民科学におけるデーターの評価・分析、中国における保護の状況そしてオンラインによる韓国の市民による保護活動の報告が行われその質疑が行われました。特に個体数が全国で280羽(1年間確認できなかった個体20羽も含む)、雛も64羽になったが市民の取組みが足踏み状態という問題があること。市民科学のネットワークが充実し情報量が増加しつつあり移動の形態や気象状況と移動の関係が把握できるようになったこと。そして中国では桁外れの8、500羽が北方の黒竜江、ウスリー川、松花江に囲まれる広大な湿原10万km2(渡良瀬遊水地の約3、000倍)の中で生息し、毎年10月下旬に中国南部の長江流域に渡って越冬すること。また韓国では個体数は日本とほぼ同じ程度の257羽であるが放鳥個体数は91羽で少ないが、その保護活動は農協など市民団体が行っていること。など多くの知見が得られました。【各地からの報告】は、国内4地域の報告がありました。最初に小山市の浅野市長の「渡良瀬遊水地の繁殖状況とこれからの展望について」で、野外繁殖の様子、近況そして母親個体の事故と死亡、雛の間引き行動など生きること、生かすことの難しさなどの他、コウノトリとの付き合い方、小山市だけの単独の取組みでなく渡良瀬遊水地全体での取組みの必要性などについての報告があり注目を浴びました。その他、干拓地での農業のシンボル化をめざす河北潟(石川県)、国内最後の営巣地に再び繁殖した小浜市(福井県)、ふるさとづくりの核として営巣をめざす南丹市(京都府)そしてオンラインによるコウノトリと共生する農業をめざす韓国イエサン郡の報告などがありました。それぞれ、その地域の環境と文化・生活に根付いた取組みの報告で大変興味深く拝聴しました。簡単な食事後【各地の報告、連絡、交流】では、参加団体、参加者の自己紹介と活動の報告交換会があり小山市からは6名が参加し小山市とその活動をPRしました。時間が許せば、来訪団体とさらにゆっくり意見交換をしたかったのですが。最後に「人間も生態系の一部」に基づく自然との相互信頼がコウノトリとの関係を深化させてくれるとの市民交流会宣言が採択されて締めくくりになりました。

浅野小山市長の報告

会場の様子

# 「コウノトリ未来・国際かいぎ」参加報告

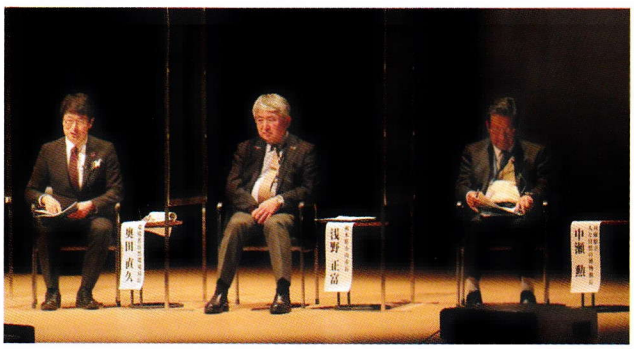
文　ラムサール湿地ネットわたらせ　門馬 悠一

コウノトリ繁殖の先進地である兵庫県豊岡市で10月30日、31日の2日間にわたって「コウノトリ未来・国際かいぎ」が開催されました。 海外からはニュージーランド、韓国での研究成果の発表がありました。 しかし、海外の参加者は、コロナ禍での渡航制限からリモート参加を余儀なくされました。 小山市からは、浅野市長を初め、総勢9名が参加しました。

主催者側の開会あいさつに続いて、総合地球環境學研究所長で京都大学名誉教授の山極壽一博士による基調講演が行われました。その中で山極博士は、ゴリラの社会生態学的研究の過程で遭遇したエボラ出血熱の人類への感染について触れ、人類が科学技術によって自然界のバランスを崩した結果であると戒めながら、命を繋ぐ多様な共生社会をデザインする必要性を説いていました。

セッション1の「コウノトリの未来」では、国内の個体群復活が7府県で34の営巣が確認され、個体総数は280を超えたことが報告されました。更に、個体群の遺伝子の多様性化についての研究成果が発表され、韓国からは、近親交配の発生指数が増加の傾向にあることから、日本やロシアとの間で個体交換プログラムを導入して遺伝的多様性を確保する必要性が提言されました。

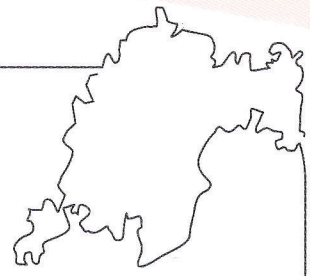
セッション2の「共生社会(コウノトリとの)を目指して」では環境省自然環境局長奥田直久氏、豊岡市役所コウノトリ共生部長川端啓介氏等からコウノトリとの共生社会を目指す取り組みについての報告がありました。一方、このセッションで浅野市長は、「渡良瀬、 そしてコウノトリ ～地域の思いをつないで～」と題して、 コウノトリと共生する持続可能なまちづくりへの思いを講演しました。浅野市長の講演については、パネリストとして参加した青山学院大学の福岡伸一教授や上智大学地球環境學研究所のアン・マクドナルド教授が非常に高く評価しておりました。 特に、アン・マクドナルド教授は、「地域のリーダーが生物や環境保全について心から語り掛ける姿に接して日本の未来は明るいと感じた。 環境と経済の両面について語れる地域のリーダーダだ」と浅野市長のプレゼンテーションに注目していました。



「コウノトリ未来・国際かいぎ」で講演する浅野市長

セッション3「私たちの未来」では、コウノトリ繁殖地である豊岡市、小山市、野田市、福井県越前市、島根県雲南市の児童たちがリモートで交流し、「コウノトリが暮らす地域の取り組み」について発表を行いました。小山市からは小山市立下生井小学校6年生9名が報告をおこないました。また、「コウノトリも暮らすまちの未来」についてのディスカションではパネリストとして小山市から大学生の安藤晃太さんが参加して、自然と人間が共生出来る心地よい街づくりを目指したいと抱負を語りました。

今回豊岡市で開催された二つの催しである「コウノトリの生息を支える市民交流会」と「コウノトリ未来・国際かいぎ」での浅野正富市長の講演や下生井の子どもたちの参加は、栃木県小山市の存在を全国に広く知らしめる結果になりました。



# 市民が創る田園環境都市 小山

文　菊池 浩文　霜田 愛子

浅野正富市長が誕生してから一年を迎えようとしていた6月に、あさの正富後援会で繋がった有志で「田園環境都市小山のまちづくりについて自分たちでできることを考えてみよう」と集まりました。浅野市長が長い間自然環境保全の活動をされてきたこと、また法律の専門家として私たちの生命・暮らしの安全に関わる問題に尽力されてきたことを昨年の市長選出馬で知ることとなり、このような方が地方自治体の首長になってくれたなら、小山市は全国でも誇れる自治体になっていくと感じました。真に豊かな社会が小山市という一つの自治体から地域を越え全国へと波及していく期待が広がり、そのために我々市民が主体的に行動していかなければという気持ちになったのです。

しかし、「田園環境都市?」「まちづくり?」キーワードはわかるものの、漠然としたテーマからいったい何から手をつけたらよいのか?…全くゼロからのミーティングを7月からスタートしました。本来主役である我々一人一人の市民が、自由な感覚で動いたら何が見えてくるだろう。共に学びながらできることを考えていこう。そしてアクションを起こしていこう。この考えのもとに、先ずは勉強会からスタートしました。

タイムリーに、ソトコト編集長の指出一正氏が講師の「持続可能な地域づくり―ローカルから捉え直すSDGs」というトークセッションセミナーが行われることを知り、オンデマンド配信をメンバー全員で視聴して、指出氏の携わっている様々な地域プロジェクトから沢山の刺激とヒントを得ました。その中で各々の中にヒットした数々のキーワードを皆で共有したことで、具体的な活動イメージが見え始めると共に、私達の活動が、市長の掲げる田園環境都市小山のあるべき姿に繋がる可能性を信じ始めました。そして8月、長年持続可能な地域づくりに取り組まれているNPO法人エコ・コミュニケーションセンター代表の森良氏にコーディネートを依頼し、メンバーそれぞれが小山市の今にどのような想いを持っているかを発表し合い、そして共有することから活動内容を具体化していくためのワークショップを行いました。そこで「自分の住むまちの現状を知る」ことが先ず大事な一歩だと気づき、さらに私達の活動は初期メンバーにとどまらず多くの市民を巻き込んでいくイメージであることも一致しました。

そして、9月に開催された、小山駅周辺のまちづくりを中心に意見交換を行う「市民フォーラム」には、メンバーの多くが参加を試み、10月には「田園環境都市小山を自分の足で歩く」の第一弾として、渡良瀬遊水地巡りを実施しました。一面に広がるヨシ・オギの違いを手に取って見比べたり、なぜセイタカアワダチソウを除去する必要があるか等を浅野市長はじめガイド協会門馬氏にガイドを受けながら歩き、また、谷中村史跡を眺め当時の村民に思いを馳せながら散策し、渡良瀬遊水地の成り立ちに改めて感慨を深めました。

活動は始まったばかりですが、持続可能な社会を創るには、歴史をふり返ることも必要であり、そこから豊かな資源を見つめ直す目を養うことの大切さを感じています。移り行く時代の中でも、何が大切なのかをいつも“認識し共有する”ことを継続していく。それが持続可能なまちづくりには必要であろうと、浅野市政（姿勢）から学んでいます。

今の私達は、結果を出すことに意識を置くより、自分の住むまちを常に見つめ、共に考え、市民で対話をしながら行動を起こす、ということをやっていこうと考えています。そういった市民の意識と行動の先にこそ、ずっと暮らしたいまちが在ると信じ、浅野市長が掲げるバランスのとれた田園環境都市小山を次世代へ繋いでいこうと考えています。

市民が創る田園環境都市 小山の会（仮称）の一部メンバーと

## 小山市で開催された第２０回全国菜の花サミット　浅野正富

１２月１１、１２日、小山市立文化センター大ホールと市役所新庁舎の会議室において、小山市主催による第２０回全国菜の花サミットが開催されました。

今回の菜の花サミットは、前市長の下で昨年４月に開催される予定でしたが、コロナ禍のため1年延期となりました。昨年７月末に市長就任した後、共催者であるＮＰＯ法人菜の花プロジェクトネットワークの代表藤井絢子氏の訪問を受け延期の事情を知った私は、市役所の２０２１年行事予定を確認しました。すると２０２１年５月には新庁舎への引っ越しを控え４月は市役所全体で引っ越し準備となることから、藤井氏に２０２１年４月の開催は事実上困難、菜の花の時期を逸するので小山市での開催を返上したいと相談しました。

藤井氏からは、サミットは２０回で終止符を打つので必ず開催したい、今までも菜の花の開花時期でないときに開催したことがあるので新庁舎での業務が落ち着く秋以降で構わないから是非開催をとの要望を受け、４月から１２月１１、１２日に時期を移しての開催が決まりました。

小山市としても、今回のサミットで、今まで取り組んできた菜種を絞って菜種油を作り、販売して調理に使用された後の廃油を回収し、それをＢＤＦ（バイオディーゼル燃料）に精製してディーゼル自動車の燃料として利用する取組を紹介するとともに、その他渡良瀬遊水地でのコウノトリの野生復帰を目指して取り組んできたふゆみずたんぼ等の取組等を振り返って、田園環境都市のまちづくりなども含めて小山市での今後の取組みを展望する機会とすることにして、開催準備を進めました。

今年５月にはプログラムも固まり、発表者や分科会担当者での顔合わせやミーティングはコロナ禍の中で日程繰り延べやオンライン開催を重ねての準備となり、１２月実際に参加者に来場してもらっての開催ができるか危ぶまれていましたが、１１月以降の感染者急減によって、今回無事約３００名の皆様に全国からお集まりいただいて開催することができました。

１日目の１１日は、國學院大學研究開発推進機構の古沢広祐客員教授の「地球の健康（ワンヘルス）と生物多様性」の基調講演にはじまり、菜の花サミット２０年、生物多様性を育む農業国際会議（ＩＣＥＢＡ、小山市では２０１６年に開催）１０年の振り返り、風景社による風土調査に関する報告、一般社団法人日本社会連帯機構の永戸祐三代表理事による労働者協同組合法成立を踏まえての社会連帯による行政との協働に関する提案等があった後、まちづくり、菜の花プロジェクト、学校給食を中心としての農業と食、行政と市民の協働、コウノトリ・トキの取組みの５分野に分かれての分科会が行われました。２日目の１２日には、前日の議論を踏まえてのパネルディスカッションを行い、最後に「おやま宣言」を採択して閉幕となりました。

今までほとんど接点がなかった、菜の花プロジェクトと生物多様性農業等の関係者が一堂に会して、循環型社会・持続可能な社会の構築のために協働していくことの必要性を確認できたことの意義は極めて大きく、採択された「おやま宣言」に全国の各地方都市で「田園環境都市」のまちづくりを実践していくことが謳われたことは、今後小山市が「田園環境都市　小山」のまちづくりを推進していく上での大きな力となります。

これからは、皆様と一緒にこの宣言に恥じないまちづくりに取り組んで行きたいと思います。

## 年会費納入・個人献金のお願い

あさの正富後援会の会員の皆様には、日頃よりご支援ご協力を頂きありがとうございます。**2022年分の年会費1,000円を2022年1月から3月末までの間に下記口座にお振込み頂きますようお願い申し上げます。**

また、あさの正富後援会では、あさの正富の政治活動を支えるために個人献金を募っております。献金頂ける方は、年会費納入と同様に下記口座にお振込み下さい。献金は随時受け付けております。

**匿名の献金を受け取ることが出来ませんので、献金お振込みの際は事前に住所・氏名・電話番号・領収証の希望の有無を、あさの正富後援会事務所まで（TEL・FAX・メールのいずれか）ご連絡お願い申し上げます。**

なお、政治資金規正法により、個人献金は、1人年間150万円以内と定められています。また、年間の個人献金が1人5万円を超えると、政治報告書に個人情報（住所・氏名等）が記載されますのであらかじめご了承ください。

足利銀行 間々田支店 普通預金口座
口座番号：５５０３３８２
口座名義：あさの正富後援会 代表 浅野正富
（アサノマサトミコウエンカイ ダイヒョウ アサノマサトミ）

※振り込み手数料はご負担願います。

**入力例：Ａ０１２３　オヤマ　タロウ**

お振込み頂く際は、ご依頼人のお名前の前に、封筒の宛名ラベルに記載されている英数字を必ずご入力ください。

### 編集後記

今回の2号は浅野市長の「田園環境都市 小山」のまちづくりの強い思いとコウノトリの近況・話題についてお知らせしました。今後はいろいろな知って欲しい課題について軟・硬織り交ぜながらお知らせしたいと思います。（楠）

田園環境都市 小山のまちづくりに対する更なる理解が深まり、市民レベルでの実現へ向けた意識が高まることを期待しながら編集作業に取り組みました。読後、皆様のご感想をお聞かせいただけたら嬉しいです。（門馬）

### 市政報告・意見交換会の開催について

創刊号において、新型コロナウィルス感染症の第三波が収束した段階で市政報告会及び意見交換会を開催予定であるとご案内致しましたが、その後、第四波、第五波と到来し、現在第六波も懸念されております。令和4年中にコロナが収束し次第、開催したいと思っておりますので、宜しくお願い致します。

あさの正富後援会事務所　https://www.asano-masatomi-supporters.com/
〒323-0034 栃木県小山市神鳥谷 1-6-19　TEL.0285-25-6577　FAX.0285-25-6627　メールアドレス：masatomi2020@gmail.com

あさの正富後援会だより | 第2号 No.02
2021年12月 発行　あさの正富後援会 編集